

関連学会印象記

第77回日本薬理学会年会

永澤悦伸*, 橋本敬太郎*

第77回日本薬理学会年会(会長：三木直正先生、大阪大学大学院医学系研究科情報薬理学教授)は、2004年3月8日から3月10日までの3日間、大阪国際会議場にて開催された。学会ホームページによると、3日間を通じて、参加者は2609名、発表演題数は1161演題とのことで、大変盛況な学会であった。

会場である大阪国際会議場は、通称グランキューブ大阪と呼ばれ、学術会議を始め、コンサートや国際会議などが数多く行われている。私自身は、ここ数年で参加した学会のうち、日本循環器学会、日本心臓病学会、日本適応医学会が同会場で開催されたこともあり、今回で4回目となる。大阪駅からは、タクシーやバスで十数分の場所にあり、また、隣接するリーガロイヤルホテルからは頻回に大阪駅とのシャトルバスも運行されており、交通の便は良い。会場周辺は、オフィス街で落ち着いており、学会には適した環境が揃っている。

昨年は、日本生理学会との同時開催という薬理学会年会として初の試みが行われたが、今回は、口演発表用のスライド受付を、携帯用USBメモリによるデータ受け渡しのみで限定する方式が初めて試みられた。USBメモリは、フロッピーに代わる記憶媒体として記録型CD、DVDとともに急速に普及しており、比較的大きな容量を保存できる点、旧OSを除きドライバレスで使用可能な点、本体の大きさがライターほどで携帯性に優れている点、書き換えが容易な点などが評価されている。過去、何度かPC持参の学会に参加したが、直前までスライドの手直しができる反面、数世代前の3kgを超える重さのパソコンを持ち運ぶのはなかなかの重労働であった。記録型CDや携帯用USB

メモリが利用できるのは、特に移動距離の長い学会ではありがたい方式である。今後、同方式を採用する学会は増加していこう。

さて、学会の内容に話を移すと、循環器関係では、レニン・アンジオテンシン・アルドステロン系や心臓リモデリング、薬物誘発不整脈に関する話題などが挙げられていた。このうち、薬物誘発不整脈に関する話題は会期中2つのシンポジウムが企画されており、薬理学領域での関心の高さが示されている。初日に行われた「薬物誘発致死性不整脈」は、主にClass III抗不整脈薬の有用性と危険性について、基礎と臨床の両面から話題提供が行われた。皆様ご存じのように、Class III抗不整脈薬は、心臓の I_{Kr} チャネルをブロックすることで活動電位持続時間を延長し、体表面心電図上では、QT延長として表現される。CAST報告以降、 Na^+ チャネル遮断薬に代わる抗不整脈薬として、Class III薬に期待が集まっていたが、主作用であるこのQT延長は、抗不整脈作用をもたらす反面、過度のQT延長は逆に致死性心室性不整脈の誘発の危険性(催不整脈作用)も有しており、この点が臨床で大きな問題となる。一方、3日目に行われた「新薬開発の観点からみた“薬剤によるQT間隔延長”に関する非臨床・臨床試験とその評価」は、抗不整脈薬以外の薬剤によるQT間隔延長作用を新薬開発段階で評価する方法について、話題提供された。抗不整脈薬以外の薬物によるQT間隔延長作用は、一部の抗ヒスタミン薬や抗精神病薬、抗菌薬などで報告されており、発生頻度は少ないがやはり致死性不整脈誘発による突然死の報告もあり、販売中止になったものもある。このため、現在、製薬企業における新薬開発では、この抗不整脈薬以外の薬物によるQT間隔の延長作用は重大関心事となっている。現在、新薬の開発段階で

*山梨大学大学院医学工学総合研究部薬理学



写真1 Dr. Bloomとともに

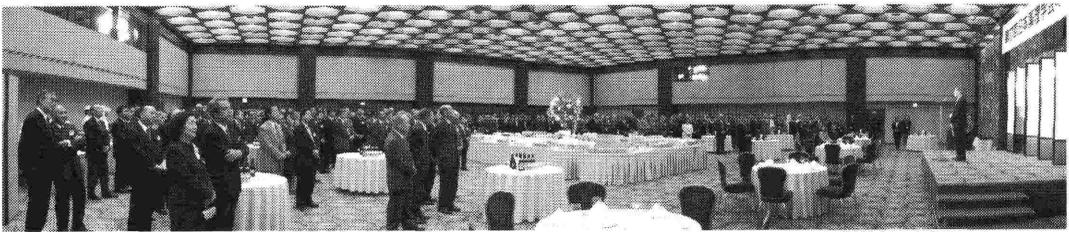


写真2 懇親会にて

QT 延長作用のスクリーニングを行う動きが盛んであり、今後は、新薬承認の過程の中で、QT 延長作用の評価を必須とする方向で話が進んでいる。スクリーニングは、*in vitro* と *in vivo* での検討が行われている。QT 間隔測定は、主に *in vivo*、臨床試験での検討で用いられているが、心拍数の影響を

受けやすく、補正方法も含め評価方法は現在もなお議論されている。

なお、この薬剤誘発の QT 延長に関する話題は、2004 年 11 月 23 日より甲府で開催される国際心臓研究学会 (ISHR) 日本部会総会でも取り上げられる予定であり、多くの皆様のご参加をお待ちする。